

武佐宿～野洲駅 12km を歩く

4月5日いつもの4人で先回の続き、武佐駅から野洲駅まで約12kmを歩きました。お天気は上々、こちらはまだ桜がいたる所で咲き誇り、まるで花見に来たような一日でした。

一番列車で近江八幡駅へ

今回も東浦駅 5:55 の一番列車で出かけたが、朝はびっくりしたことが一つあった。5:00 に目覚ましをかけていたのだが、ベルが鳴らなかったのだ。それでも 5:10 には気がついたのであわてて起きた。朝飯は先回のように食べずに、車中で食べるようにおにぎりを準備しておいた。いつもの時間に食べたほうがよかろうということと、朝あわてなくてもよいからだ。列車はかなりのお客が乗っていた、もちろん仕事の人たちがほとんどで、数軒隣の上田さんの顔も見られた。毎日この時間で出勤するのは、一日や二日ならいざ知らず大変だろう。

大府、大垣、米原で乗り換え、近江八幡では近江鉄道で武佐駅まで行くのだが、10分程の待ち合わせで 8:50 には到着予定だった。しかし、8:34 近江八幡に到着すると友が、近江鉄道は 9:01 の電車と言う。エッ違うだろう、私は少し前にダイヤを調べたが、友は今回調べたと言う。そこで気がついたのが、3月でダイヤ改正があったのではということだ。あわてて JR の改札を出て近江鉄道のダイヤを確認すると、友の言うように 9:01 だった。ここで 30 分も時間をロスするのはもったいないので、タクシーで武佐駅に向かった。おかげで(1,500-640 円の半額)420 円の出費増になったが、半額の負担ですむことでありやむを得ない。

立派な日本家屋が並ぶ

武佐駅を 9:00 にスタートして、駅隣の踏切を渡り電柱がつづき両側に家並が並ぶ街道を少し行くと、少し奥に神社があり手前は広い公園になっていた。そこに一本の大きな木と説明板が設置されていた。何かなと見ると、「伊庭貞剛邸」(いばていごうてい)

跡とあり、その下に生誕の地とある。伊庭家は近江守護佐々木家の流れをくむ名家。どんな人物かと言うと、明治元年に京都御所の警備隊士となり、その後住友に入社する。明治27年四国別子銅山の支配人となり、亜硫酸ガスなどの煙害対策と精錬所の移転、さらには植林事業にめどを付けた.....とある。



長屋門の家



明かりとり?のある家

公園の先には立派な長屋門の家や、明かりとりと思われる小さな屋根がのって3層の屋根を持つ立派な家が並ぶ。歴史ある建物が並ぶ街並は、日本建築のすばらしさを感じられる。そんな街道を10分も行くと国道8号に合流するが、横文字名の会社が並び反対側には菜の花畑が続き、黄色の花が美しい。でも国道ではあるが、歩道があったりなかったりしているのだ。そんな道を進むとフォークリフトの三大メーカーと言われるTCMの滋賀工場があり、フォークリフトがたくさん並んでいた。そこから5分も行くと六枚橋の交差点で、街道は左折して直に立派な蔵があり、そこを右へ曲がって行く。

あちこちで桜や、野の花の競演

すると満開の桜が目飛び込んでくる、隣には〇〇首洗いの池の看板もある。近くまで行きよくよく見てみると、「住蓮坊首洗い池」だ。住蓮坊とは聞いたこともないが、鎌倉時代前期の坊さんで、当時、法然上人の教団が既成の教壇からうとまれつつも力をつけていった。そんな時、興福寺によって法然上人らとともに罪に処せられるように訴えられていたが、後鳥羽上皇が熊野臨幸の間、住蓮は礼讃を唱えた。これに帰依する人多く、これがきっかけで後鳥羽上皇の二女官が帰依した。これを知った上皇の怒りに触れ法然上人門下への弾圧が強まり、住蓮は翌年処刑された。その首を洗った池だと言う。

よく分からないがあったような、なかったようなお話である。

その先は緑の麦畑が広がっていた。緑の中に立っていると、とてもさわやかな気持ちになれる。緑の畑の端には古墳を思わせる小さな小山があって、数本の桜の木がピンク色にそまり濃い緑と対象的で、思わずシャッターをきった。



住蓮坊首洗い池の桜



麦畑と桜

そんな道を進んで行くと八幡神社と忠魂碑があり、ここにも桜がきれいに咲き誇っていた。そのすぐ先で、ムシコ窓があり明かりとりと思われる小さな屋根がのって3層の屋根を持つ立派な家がここにもあった。かと思えば隣には草屋根の家があったし、立派なお堂のお地蔵さんが二か所もあった。そして、集落が途切れたところはかなり広い駐車場のある「あおば乳児園」があらわれた。乳児園とは何歳までの子供を預かるのだろうか。

そこからは平たんな畑が広がり、何にもない風景だ。遠くに工場が建ち、新幹線が走っているのが見える。すると畑の一角が区切られて、「3LDK 2452万円より」の看板が立っている。8区画の売り出しでいずれも土地は60坪くらい、坪単価は16万円程だったのがびっくり。東浦なら25万円～30万円はする場所と思う。でもこの辺り新幹線は通っているが駅はないし、仕事はどうなんだろう？ 地図を見ると大きな会社が付近には多く立地しているようだが。その隣に一軒だけ建つ家の庭では、老夫婦が畑作業をしていたが、老夫婦だけで住んでいるのだろうか？ その家の庭も2本の桜が満開であった。

畑の続く道を行くと日野川にぶつかる、「横関橋」を渡るとすぐに右折して堤防道を進む。渡し場跡があるはずなのだが、竹が生い茂りそれらしいものは見当たらなかった。春の日差しを浴びて堤防道は、竹林が風をさえぎりとても温かく紫色の花大根が咲き、

ツルキキョウの紫の花もきれいだった。これら花の名前は友の細君に教えてもらったもの。それに、たんぽぽの黄色の花も美しい、たんぽぽの花は長く咲いているので、彼岸花のようにたくさん植えたらいいのと思う。でもなぜかタンポポの咲く道で売り出している所はない。

源義経の元服を伝える鏡神社

この辺りは国道8号と合流したり離れたりして進み、道の駅「かがみのさと竜王」の看板が見えてから少しすると、旅籠〇〇とした立て札が家の前に並ぶようになった。そして道はゆるやかな上り坂が続き、鏡口の交差点を過ぎると珍しく天台宗のお寺があり、道の向い側には「徳化学校跡」の立て札が目についた。名称が変わっているので見てみると、明治8年に大願寺徳化学校が開かれ、鏡村と横関村の子供たちが教育を受けられるようになった。その後明治11年鏡神社の隣に専用の校舎が建築されたという。

その先には「源義経宿泊の館跡」の石柱と立て札があり、すぐ隣には本陣跡の立て札もある。しかし、ここは宿場ではないので間の宿であったようだ。武佐宿から守山宿は14kmほど離れており、間の宿が栄えたのだろう。そして、桜の花に囲まれた「鏡神社」の案内が見えた。鏡神社は近江源氏の佐々木一族、鏡氏が崇敬して護持したと伝えられている。本殿は三間社流造、こけら葺き南北朝時代の建築で、国の重要文化財に指定されている。義経が元服のおり参拝して、源氏の再興と武運長久を祈願したという。



「源義経宿泊の館跡」の石柱



鏡神社の入口、左の小屋根が「烏帽子掛けの松」

神社西へ130mの所に池があり、義経が元服の時にこの池の水を使ったと言われ、ま

た、元服の姿を水面に写して見たとも言われている。そのため、元服池と呼ばれている。さらに、神社入口には義経が元服して参拝した時に、松の枝に烏帽子をかけたとされる「烏帽子掛けの松」がある。このように、鏡神社は義経にまつわる言い伝えがたくさん残されている。さらに、元服後の義経を祀る八幡神社がすぐ近くにある。

ランチは鏡の里名物? かつ丼

10:50 ころ道の駅「かがみのさと龍王」に到着した。歴史コーナーがあったので参考になる資料がないかとのぞいてみた、でも滋賀県内あちこちのパンフレットが主でたいしたものはない。この辺りがほぼ中間でもあり、少し早いがお昼を食べることにした。レストランに入ると「11時開店なので時間まで少しお待ちください」と言う、確かに5分前だった。やむを得ず小休止してからランチにしたが、先月の同年会で友に私のホームページのことを話したところ、その友からあちこち歩いたらその土地の名物も味わってください、とメールがきた。それもそうなので、今回は道の駅でおいしい物が食べられるかと期待したのだ。しかし、土地の名物と言う程のものは見当たらず、私は久しぶりにかつ丼をいただいたが、とても良い味だった。今朝は5時起きなので、11時にお昼を食べても6時間後であり、丁度よいタイミングだったのでは。



道の駅「かがみのさと龍王」



平家終焉の地の看板

一休みして 11:45 にスタートし、2分も行くと元服池があり立派な石碑が立っていた。さらに8分程行くと今度は「平家終焉の地」「平宗盛・清宗父子の冢がある」と書かれた看板が立っている。義経が平家最後の総大将、平宗盛とその子清宗を処刑した平家終焉の地と言う意味だ。でも、笹や草がぼうぼうなので塚のあるところまで行くの

はやめた。

世界の村田は使う電気も自前

そこから 5 分も行くと左手に大きな工場が現れる、「村田製作所 野洲工場」だった。友が、村田製作所の主な製品は何かと言う。確か電気・電子関係だと思いと答えたが、帰ってから確認すると、本社は京都府長岡京市にあり電子部品専門メーカー。セラミックコンデンサーは世界のシェアを誇る。ほかにもセラミックフィルター、センサー類などいずれも世界的なシェアを持つ、原材料からの一貫生産が特徴。最近では自転車に乗ったロボット「ムラタクン」の宣伝が知られている。



村田製作所



murata メガソーラ野洲

その村田製作所の向かい側には、道沿いに太陽電池のパネルがずらりと並ぶ、「murata メガソーラ野洲」の看板が立っている。ということは村田製作所が運営するメガソーラということらしい。力のある大企業が自前の電力で、生産活動を展開する時代になってきたようだ。でも、これってほんとにいいことなのだろうか？ 生産活動の源である電力まで自分で確保しなければいけない状態では、本来の研究・開発から生産活動に集中することができない。つまりは産業の維持発展に必要な電力を安定して供給する能力が電力会社にないわけで、今の電力業界のあり方が問われていると思う。

また、道の駅から南東 1.5km ほどにはダイハツ工業の鏡工場があるなど、有名な企業が集まっているようだが、この辺りに大企業が集中するのは、進出に際しての優遇措置があるなど、それなりの理由があるのだろう。

天井川の昔と今

メガソーラから 10 分ほど国道 8 号から離れて集落を行くと、道端にスミレの花がそこそこに見られた。ところが、その中に白いスミレがあった。花のことに詳しい友の細君が見つけたのだが、スミレの花は紫とばかり思っていたが世間は広いものだ。白いスミレの花があることすら知らなかった。道の駅を出て 45 分程歩いてきたが、午後になると疲れを敏感に感じるようになる。川の手前に灯籠や石碑を集めて休憩コーナーがあったので一息入れることに。でもお日様が暑く涼しい場所に移動しようと、川向うに神社が見えたので木陰の下で腰をおろした。すると、その一角に立派な説明板がある。何かと見てみると今渡った川は家棟川で、昔は天井川だったのを今のように普通の状態に戻したものだ。当時の写真もあり、道の上 5m くらいのところを川が流れていたのだ。とても信じられない光景だった、改良工事を施した場所はカーブしたところで、土砂が堆積してしまったのだ。



白いスミレ



天井川の説明板(右下が昔の姿)

甲山(かぶとやま)古墳の石棺は熊本から運ばれた

家棟川から 20 分程行くと新幹線にぶつかる、そこに古墳があった。その名前が面白く公開していると言うので立ち寄った。「桜生史跡公園」と書いて「さくらばさま」史跡公園と読む。とても読めたものではない、ここは国史跡の「大岩山古墳群」で 8 基の古墳が国史跡に指定されている。

古墳を説明する館があり入ってみる、おねえさんが一人いて説明してくれおおよその

ことは分かった。8基ある古墳のうち二つは公開されているという、せっかくなので近くにある甲山古墳を見学した。館を出てすぐ隣にある小山を登ると、入り口が開いている。中に入ると大きな石棺が安置されていた。この古墳は6世紀中ごろに造られた直径約30m、高さ8mで赤く塗られた家形石棺が安置されていた。その石棺の石はなんと熊本県宇土半島から運ばれたものと言う。副葬品には冠や大刀のサヤの飾り金具、ガラス玉など、武具類や鞍などの馬具など珍しい物が出土しているという。しかし、多くの副葬品が入っているはずの石棺の中には、墓泥棒が荒らしたためガラス玉2個しか残っていなかったという。



桜生史跡公園にて



熊本県宇土半島から運ばれたという石棺

でも、こんな大きな石を熊本県からほんとに運んできたのだろうか？ 誰も見た人はいないのだし、石の成分が同じとはいえ、他に同じ成分の石がないと何故断言できるのだろう。私には理解不能である。(同じような石でも、その成分からどこで産出した石か分かるそうです。土器や陶器もそのうちに分かるようになるという)

丘にもあるサルベージ会社

甲山古墳をでると新幹線から少し離れて続く道は、用水が流れ桜が満開の並木が続いていた。街道と新幹線の間は農地で、のんびりした田舎の風景がおだやかだ。そんな道を5分も行くと大峰山の石碑とお堂があった。この辺りでも大峰山信仰がさかんだっようだ。その先からは集落が続く街に入って行く、すると、ちょっとしたビルがありその看板に「サルベージ野洲」と書かれていた。海でもないのにサルベージとは、と一

瞬思った。すると友が、さきほどの家棟川のように天井川対策で仕事があるのだろう。



近江盆地で見つけたサルベージ会社



茅葺の造り酒屋

確かにそれは言える、しかし、近江盆地のまんなかでサルベージ会社があるなんて普通は想像しない。そんな話をしながら 10 分も行くと茅葺の立派な家があらわれた、大きな釜が一つ置かれ、白い漆喰仕上げと格子の窓が落ち着いた美しさを醸しだしている。どんな家かと前まで行くと、造り酒屋さんだった。なるほど.....

その先で新幹線の高架をくぐると、駅前の通りで野洲駅 13:44 の電車に乗り東浦駅に 16:20 帰着した。